

## 開学記念リレーシンポジウム「大学と地域文化」を開催しました

平成18年2月4日(土)13:00より県立広島大学開学記念リレーシンポジウム「大学と地域文化」を広島キャンパス大講義室で開催しました。



### 記念講演

**演題:「人文学の社会連携を展望する」**

**講師: 広島大学大学院文学研究科長 岸田 裕之<sup>ひろし</sup> 教授**

岸田先生は、かつて携わられた『広島県史』の編纂やNHK大河ドラマ「毛利元就」の制作、そして最近取り組まれている国立大学の独立行政法人化に伴う新規事業のご経験から、大学の社会連携の方向性について話されました。そして、学問研究においては、個々人が専門分野の固有の価値と限界を認識することの重要性について指摘されたほか、本学への期待も込めて、広島県が中国地方の東部と西部の架け橋になるような理念を打ち出すことで、直面する政治的・経済的・文化的な障壁は乗り越えることができるとお話しになりました。



### シンポジウム「厳島の歴史と文化－宮島の魅力再発見－」

その後、休憩をはさみ、14:45からシンポジウム「厳島の歴史と文化 宮島の魅力再発見」が始まりました。これは、昨年秋から本学が取り組んでいる重点研究「『宮島』を素材とする人文科学分野の総合的な学術的研究と学生教育を連動させる教育方法の開発」の最初の成果報告であり、人間文化学部<sup>あこが</sup>に所属する6人の教員と、1月に卒業論文を書き終えたばかりの2人の学生が、様々な学問領域から見た厳島の魅力や厳島研究の可能性について報告をおこないました。

#### 基調報告

**演題:「世界遺産厳島神社と石見银山」**

**講師: 人間文化学部長 秋山伸隆教授**

まず、日本史を専門とする秋山伸隆人間文化学部長が「世界遺産厳島神社と石見银山」と題する基調報告をおこないました。今年で世界遺産登録10周年を迎える厳島神社と、来年の登録を予定している石見银山が実は歴史的に深いつながりがあることについて、美術工芸品や古文書によって明らかにしました。



#### パネルディスカッション

**「『平家納経』の成立の背景を探る 『源氏物語』享受史との関係を視点として -」**

**西本寮子教授(日本文学)**

『源氏物語』が古典化した12世紀の文学状況を紹介し、平氏政権が王朝文化に<sup>あこが</sup>憧れ、それを継承しながらも、



新たな文化創造にも積極的であった点について述べました。

**「<sup>ぶがく</sup> 巖島の舞楽 に見る日中文化の異質性」  
柳川順子助教授(中国文学)**

都から巖島にもたらされた舞楽「<sup>らんりょうおう</sup> 蘭陵王」が、もとは中国に由来するものであること、日本では<sup>みやび</sup> 雅やかな王朝文化となった舞楽が、唐朝宮廷内では俗的なものと位置づけられていたことを指摘しました。

**「中世における巖島理解と法華經 <sup>はくらくてん</sup> 能(白楽天)と(巖島)から」**

**樹下 <sup>きのした</sup> 文隆教授(日本芸能史)**

巖島の神は中世の人々には竜の娘と理解されていたこと、法華經の<sup>りゅうにょじょうぶつ</sup> 竜女成仏説と巖島が結びついていたことを指摘し、平氏の法華經奉納の背景に、巖島が法華信仰の霊地という考えがあったと推定しました。

**「<sup>えいご</sup> 絵画から見えてくるもの イギリスにおける自然観との比較を通して」**

**天野みゆき教授(英文学)**

巖島が観光名所地として広く知られ、多くの旅人が訪れるようになった江戸中期(18世紀)、イギリスでも「絵になる(picturesque)」風景を求めて旅をするブームがおきていたことを指摘し、<sup>ながさわのせつ</sup> 長澤蘆雪の「巖島八景」を素材に、当時の人々の美意識や自然観などについて紹介しました。

**「文化財にひそむ歴史事実を探る 巖島神社五重塔初重柱銘を中心に」**

**本多博之助教授(日本史)**

五重塔 <sup>しよじゆう</sup> 初重柱銘の分析により、藤原神主家時代の末期に五重塔では大規模な補修工事がおこなわれ、<sup>しゃかさんぞん</sup> 釈迦三尊像(現大願寺蔵)も制作安置されたこと、そしてそれは大願寺 <sup>そんかい</sup> 尊海を中心に巖島の町衆や社家、廿日市の町衆などが篤い信仰心のもとに結集した結果であることを紹介しました。

**国際文化学科学生**

巖島をテーマに卒業論文を執筆した村上 <sup>ひさと</sup> 寿珠さんが巖島社はもともと島にある「内宮」と対岸にある「外宮」(<sup>じごぜん</sup> 地御前神社)により構成されていたこと、やがて人々の島への移住が始まり、まず西町、続いて東町(有<sup>あり</sup>の浦)が形成されたことを説明したほか、<sup>おおち</sup> 大知徳子さんが巖島社の社内組織について触れ、かつては内侍<sup>ないし</sup>が社家<sup>しゃけ</sup>と同等の地位にあったものの、時代とともにその性格や勢力に変化が見られるようになったことを報告しました。

その後、ディスカッションに移り、日本の中国文化受容や、巖島神の性格(竜娘)と法華經の関係、さらに18世紀の



日本とイギリスにおける風景(画)のとらえかたについて、  
柳川・樹下・天野各氏から改めて補足説明がおこなわれたあと、フロア(会場)から寄せられた質問に対し、各パネリストが回答しました。

最後に、学生パネリスト2人が再び登場し、「これからも多くの分野の人たちと宮島の共同研究をしたい」という気持ちが示されたほか、コーディネーターからも世界遺産を伝えていくことの重要性和、今を生きる我々はその責任を自覚することの必要性、そして今回のシンポジウムが今後の地域連携の始まりであり、これからも教員と学生が一丸となって巖島研究に取り組み、得られた成果については公開講座などを通じて社会還元していくことの決意表明がなされ、17:00にシンポジウムが終了しました。

粉雪も舞う寒い一日でしたが、194名もの方々が来場され、記念講演や基調報告・パネルディスカッション、そして会場(講義室)外(1階ロビー)に設置した本学所属教員の研究内容を紹介する様々なパネルや、本学が所蔵する巖島関係資料(江戸時代～昭和初期の版本・絵画・書籍・写真資料)の展示を、熱心にご覧になっていらっしゃいました。

多数の方々のご来場に対し、心より感謝申し上げます。なお当日、フロア(会場)からお寄せいただいたにもかかわらず、回答できなかった質問につきましては、今後開催を予定しております公開講座に反映させていただきます。

(本多博之)

